ポスターセッション（ P51）
成人先天性心疾患3

座長:
浜田 洋通（東京女子医大八千代医療センター 小児科）
Thu. Jul 7, 2016 6:00 PM - 7:00 PM ポスター会場 (天空 ノース)
P51-01～P51-05

6:00 PM - 7:00 PM

[P51-05]先天性心疾患術後に心房細動に対するカテーテルアブレーションを行った症例の検討

○籏 義仁, 山崎 武士, 藤井 隆成, 藤本 一途, 富田 英 (昭和大学横浜市北部病院 循環器センター)
Keywords:カテーテルアブレーション、心房細動、先天性心疾患術後

【背景】先天性心疾患術後に発症する上室性頻拍（ SVT）は，先天性心疾患（ CHD）心内修復術後遠隔期に出現する最も頻度が高い不整脈合併症である。その多くは心房頻拍（ AT）や心房細動（ AF）である。近年，心房細動に対するカテーテルアブレーション（ ABL）の成績も向上し， CHD術後症例にも適応されることがある。【目的】心房細動の ABLを行った CHD症例を検討した。【方法】2000年4月から2015年10月までに SVTがあり ABLを受けた110例（36±16歳）を検討した。そのうち9例（38歳±12歳，男性5例）が AFの治療を受けた。1例は外科治療の適応と判断され心房頻拍の ABLのみを行い， Fontan（ TCPC）と maze手術を受けた。8例（ ASD 2, AVSD 1, one and one half repair 2, TCPC Fontan 1, TOF 2）はすべて発作性 AFであった。肺静脈隔離（ PVI）と GP ablationに加えて Focal ATや macro-reentrant ATに対する ABLを行った。【結果】 TCPC Fontan と TOFの2例では maze手術の既往があった。 one and one half repair， TCPC Fontan の各1例では下大静脈-右心房間の穿刺から心内へのアプローチを要した。6例では RA内での AT/AFLに対する ABLも行った。2例は RA内に multiple focal ATを合併していた。これら2例は RA圧の上昇と巨大 RAを合併していた。３例で抗不整脈薬の継続を行っている。全例で合併症はなかった。【まとめ】 CHD術後に薬剤抵抗性 AFが起こる症例がいる。肺静脈隔離術のみでは治療の限界であり， RA側の ABLが必要になることがある。先天性心疾患術後心房細動に対する治療として ABL治療オプションにひとつであるが，十分な治療戦略を練る必要がある。

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery